

ルカの福音書3章後半「バプテスマー神と人との接近」その2

1A 主の道の用意「悔い改めのバプテスマ」1-20

1B 罪の赦しの説教 1-18

1C 背景 1-6

1D 歴史 1-2

2D 聖書 3-6

2C 内容 7-14

1D 神の怒り 7-9

2D 悔い改めにふさわしい実 10-14

3C 目的 - キリストの到来 15-18

2B 悪事に至る責め 19-20

2A 人の道の用意「民衆と一しょのバプテスマ」20-38

1B 神による任命 21-22

2B 神に至る系図 23-38

1C マリヤの先祖

2C アダムの子

3C 神の子

本文

私たちは、前回、四百年の月日を経て、神のことばがイスラエルに与えられて、新しい時代の幕開けが来た話をしました。時は満ちていました。ローマが支配し、ユダヤ人の王はローマに媚びるヘロデの息子たちでありました。平和と秩序はありましたが、圧政の中で苦しむユダヤ人たちは、自分たちのメシヤ、あるいはキリストが到来することを待望していました。そこに現れたのが、バプテスマのヨハネです。

彼が説いたのは、「罪が赦されるための悔い改めに基づくバプテスマ(3:3)」でありました。悔い改めとは、思いを変えることです。それは、自分が人生において舵取りをしていたところを、神にそれを明け渡し、神が主導権を握るようにしていただくことに他なりません。表面的な行ないを変えることではありません。そして大事なものは、罪が赦されるための悔い改めであることです。悔い改める者に、神は豊かな憐れみを注いでくださいます。その罪は一切帳消しにされます。主は情け深く、憐れみに富み、怒りに遅い方です。ですから、福音の始めは悔い改めであります。

ところで、ユダヤ人たちは、自分たちは神の約束が与えられているイスラエルの子孫であることに安住していましたが、ヨハネははっきりと、あなたがたは悔い改めなければ神の御怒りが下ると宣べました。そこで、人々が神への悔い改めを行ない、バプテスマを受けました。神への悔い改め

は、そのまま人に対するいたわりが変わります。そこには、取税人や兵士も来て、人々から嫌われている人々も来て、その中で自分を変えることを彼らは決心したのです。そこで私たちの学びは、15 節から始まります。

3C 目的 - キリストの到来 15-18

15 民衆は救い主を待ち望んでおり、みな心の中で、ヨハネについて、もしかするとこの方がキリストではあるまいか、と考えていたので、

これだけの霊的変革をもたらした預言者ヨハネです。彼らの期待はヨハネに向けられました。そしてヨハネ自身がキリストではないか、と思いました。

16 ヨハネはみなに答えて言った。「私は水であなたがたにバプテスマを授けています。しかし、私よりもさらに力のある方がおいでになります。私などは、その方のくつのひもを解く値うちもありません。その方は、あなたがたに聖霊と火とのバプテスマをお授けになります。

ヨハネは、水でバプテスマを授ける神のしもべであることを公言しました。メシヤ期待を皆に対して否定しました。イスラエルの民が置かれていた状況を見ると、彼らの期待は理解できます。私たちがこの社会に生きていて、その閉塞的状況の中で呻いている時に、それを、言葉をもってはっきりと答えることのできた人がいれば、その人の言葉こそが自分を救ってくれると期待します。神のしもべに対しては、絶えず、多かれ少なかれ、メシヤ的な期待が寄せられます。それが必ずしも、キリストご自身を求める期待ではなく、用いられる器に対する期待である訳です。

しかし、ヨハネがすぐに、「私よりもさらに力のある方がおいでになります」とキリストご自身を指し示しました。「力のある方」というのは、メシヤによる救いを表しています。力をもってイスラエルの民を贖うことを預言者らが預言しました。例えばイザヤは生まれてくる男の子は、「力ある神(9:6)」と呼ばれています。

このように、神のしもべはすぐに神ご自身に目を向けさせます。エジプトのパロが、ヨセフに対して、「あなたは夢を聞いて、それを解き明かすということだが。」と言ったのに対して、ヨセフは、「私ではありません。神がパロの繁栄を知らせてくださるのです。(創世 41:16)」と答えました。そして、ローマの百人隊長コルネリオが、ペテロの足元にひれ伏した時に、「お立ちなさい。私もひとりの人間です。(使徒 10:26)」と言い、それからイエス・キリストを宣べ伝えました。

力ある神に用いられるということは、近くに善悪の知識の木が置かれているアダムに似ています。神は私たちをお用いになりたいのです。けれども、自分の知識や力であるとする高慢が私たちのすぐそばに来ます。それで、罪に陥るのです。ですから、ヨハネや他の神のしもべのように、神に栄光を帰する者が神に用いられることになります。

そして自分自身とこの方の圧倒的な差異を、「その方のくつのひもを解く値うちありません」という言葉で言い表しています。当時は、人々はほこりの立つ道をサンダルで歩いていました。ユダヤ人のしもべでさえが、このことを避けるぐらいの卑しい仕事でした。その値打ちさえないと行って、ヨハネがいかに力強い働きをしようとも、イエスご自身が圧倒的に尊い方であるということです。

そしてヨハネは、自分の水のバプテスマと聖霊のバプテスマを比べています。「あなたがたに聖霊と火とのバプテスマをお授けになります。」と言っています。同じ著者であるルカが、使徒の働き1章で、この言葉をイエスが引用されたことを書き記しています。「ヨハネは水でバプテスマを授けたが、もう間もなく、あなたがたは聖霊のバプテスマを受けるからです。(5節)」そして、聖霊があなたがたの上に臨み、地の果てまでのイエスの証人になると、主が約束されました。

聖霊のバプテスマについての重要性は、言うまでもありません。それは、使徒の働きを読むことによってはっきりと分かりますが、実はルカは使徒たちの働きの中にいて、実はイエスご自身が聖霊に満たされる方であり、それゆえ地上で力ある働きをすることができたのだ、ということを見ました。もちろんイエスは神の御子であり、私たち人間が聖霊の力を必要としているのとは全く違います。けれども、人としてこの地上を歩まれたイエスは、私たちに聖霊に満たされることこそが人として生きる理想の姿なのだ、イエスを模範としなさい、ということを教えています。これからルカによる福音書を続けて読んでいくことによって、聖霊に満たされることもイエスのご生涯から学ぶことができます。

そしてバプテスマのヨハネは、「聖霊」のみならず「火」によるバプテスマでもあると言っています。この火が何を意味しているか、17節の言葉で説明しています。

17 また手に箕を持って脱穀場をことごとくきよめ、麦を倉に納め、殻を消えない火で焼き尽くされます。

これは当時のイスラエル人にとって、ありふれた光景です。打ち場において、麦を箕によって空中に持ちあげます。風によって殻が飛んでいきます。そして、落ちた麦を倉に納めます。これは、神がご自分のものとされた者を御国に入れて、そうではない悪者を焼き尽くす裁きの時に使われる表現です。「悪者は、それとは違い、まさしく、風が吹き飛ばすもみがらのようだ。それゆえ、悪者は、さばきの中に立ちおおせず、罪人は、正しい者のつどいに立てない。(詩篇 1:4-5)」ですから、神は正しい者と悪者を選び分けることをなさいます。そして消えない火で焼く、というのは、これはまさしく地獄の火であります。ヨハネは、神の御怒りが下ることを宣べ伝えましたが、自分の後に来られる方こそが、人を燃える火の中に投げ込む権威を持っておられることを宣言しているのです。

18 ヨハネは、そのほかにも多くのことを教えて、民衆に福音を知らせた。

ルカはヨハネの働きを、なるべく短くまとめようとしています。なぜなら、ヨハネ自身ではなくイエスご自身が注目すべき方だからです。それがヨハネ自身の意図であり、神ご自身の意図だからです。「福音を知らせた」というところが大事です。神の裁きはもちろん悪い知らせですが、それを免れるための悔い改めを彼は説きました。へりくだって神に立ちあがれば、一切の罪が赦されるのです。

2B 悪事に至る責め 19-20

しかしヨハネ自身は、悔い改めない悪者によって迫害を受けました。

19 さて国主ヘロデは、その兄弟の妻ヘロデヤのことについて、また、自分の行なった悪事のすべてを、ヨハネに責められたので、20 ヨハネを牢に閉じ込め、すべての悪事にもう一つこの悪事を加えた。

国主ヘロデとは、ヘロデ・アンティパスのことです。後にイエスがピラトから送られて、何かしるしを行わないか期待したあのヘロデであります。兄弟とはヘロデ・ピリポのことですが、ヘロデヤもアンティパスもそれぞれ自分の伴侶を捨てて、結婚しました。しかも、ヘロデヤはアンティパスのおじであります。したがって近親相姦の罪を犯しています。このような悪に対して、ヨハネは同じように悔い改めを説きました。ところがヘロデはヨハネを牢に閉じ込めました。

そしてヨハネはしばらくの間、表舞台からいなくなります。ルカによる福音書 7 章 18 節以降に、牢にいるヨハネが出てきます。イエスに対して、「おいてになるはずの方は、あなたですか。それとも、私たちはほかの方を待つべきでしょうか。」と尋ねる場面が出てきます。なぜなら、ヨハネによっては力ある方が、火によるバプテスマによってすみやかな裁きをもたらされると期待していたからです。ヨハネでさえ、イエスが行われていることが神の約束にかなっていることであるのか、その信仰が試されたのです。

確かにイエスは、火によるバプテスマも授けられます。しかし、それだけが聖書に書かれていることではありません。実にルカ伝は、復活後のイエスが聖書全体から、キリストが苦しまれることについて解き明かし、またよみがえることも聖書から語られました。力ある方が人としてへりくだる姿として歩まれるというのが、福音書の主題になります。そしてこの方に付いていく者たちが、キリストの弟子、私たちです。

2A 人の道の用意「民衆といっしょのバプテスマ」 20-38

1B 神による任命 21-22

21 さて、民衆がみなバプテスマを受けていたころ、イエスもバプテスマをお受けになり、そして祈っておられると、天が開け、22 聖霊が、鳩のような形をして、自分の上に下られるのをご覧になった。また、天から声がした。「あなたは、わたしの愛する子、わたしはあなたを喜ぶ。」

話は、バプテスマのヨハネが民にバプテスマを授けている場面に戻ります。ここでルカは、敢えてヨハネの名前を記していません。注目はあくまでもイエスご自身だからです。そして、大事なものは「民衆がみなバプテスマを受けていたころ」とあることです。民衆がみな受けているところに、イエスも水のバプテスマを受けられたのです。ここに、「イエスが、一般の人々と一つになってくださった」という真理が隠されています。思い出してください、イエスがお生まれになった時は家畜小屋の中であり、その誕生を告げられたのは社会底辺に生きていた羊飼いであり、この方は民の間に住まわれたのです。律法はモーセによって与えられましたが、恵みとまことはイエス・キリストにあって実現しました。

そして、イエスご自身が水のバプテスマをお受けになりました。なぜか？ マタイによる福音書には、ヨハネが、「私自身があなたからバプテスマを受けなければいけないのに。」と言っている部分を見つけます。けれども、イエスは「これは正しいことだから」と言われたのです。

これは一つに、ヨハネの宣教の働きをイエスが受け継いでおられることを表しています。ヨハネが説いた悔い改めによる福音は、イエスも説かれたことでありました。ヨハネの弟子がいて、イエスの弟子がいるという状態がしばらく続き、実にイエスが復活してからも、アポロなど、ヨハネのバプテスマしか知らない人々もいたほどでした。いいえ、ヨハネは水でバプテスマを授けたが、イエスは聖霊でバプテスマを授けるという連続があることを、示したのです。

そして何よりも、ルカ伝においてのイエスの水のバプテスマで強調されていることは、「人と一つになること」であります。「祈っておられると」という言葉があります。これは他の福音書にはありません。ルカ伝にはイエスが祈っておられるという言葉が数多く出てきます。人としてのイエスが、祈りによって神に拠り頼む必要性が強調されています。私たちキリスト者は、イエスの名による水のバプテスマを受けます。それは、キリストが十字架で死なれ、墓に葬られたように、私たちが罪に支配された古い人が死んで、葬られたことを示します。そして、イエスが墓からよみがえらえたように、私たちも新しくされたことを示しています。イエス・キリストにつながるバプテスマであります。私たちはキリストのものとなり、キリストが私たちにとって全となりました。イエスはその反対です。私たちと一つになるために、バプテスマを受けられたのです。神であられる方が、それに固執させることをせず、人の姿を取られて、しもべとして生きられた、そのバプテスマでありました。

そして、祈っておられたら、天が開けて、聖霊が下ってこられました。思い出してください、弟子たちが思いを一つにして屋上の間で祈っていたら、聖霊が下ってこられました。ここに私たちの見倣うべき手本があります。祈りに専念して、そこで聖霊に満たされるのです。

その聖霊は、この時、鳩のような形をしていると言っています。ここに深い意味が隠されています。鳩と言えば、ノアが洪水後の箱舟から解き放った鳥であり、神の裁きの後の慰めと安息を示していました。イエスに働かれる聖霊は、イザヤ書 40 章の冒頭にあるような慰めの働きであります。

神の裁きがあっても、その罪を二倍にして赦すような神の慰めの働きです。確かに、罪ある者は裁かれています。しかしイエスは世を裁くために来られたのではなく、世を救うために来られました。すでに罪に定められている者の罪を赦し、縄目から解き放つために来られました。慰めのため、恵みのために来られました。

そしてその正しさは、地の果てにまで及びます。ここにある出来事は、イザヤ書 42 章 1-4 節に預言されています。「見よ。わたしのささえるわたしのしもべ、わたしの心の喜ぶわたしが選んだ者。わたしは彼の上にわたしの霊を授け、彼は国々に公義をもたらす。彼は叫ばず、声をあげず、ちまたにその声を聞かせない。彼はいたんだ葦を折ることもなく、くすぶる燈心を消すこともなく、まことをもって公義をもたらす。彼は衰えず、くじけない。ついには、地に公義を打ち立てる。島々も、そのおしえを待ち望む。」

そして父なる神が、「あなたは、わたしの愛する子、わたしはあなたを喜ぶ。」と言われています。イエスの公の働きを、神が任命しておられる言葉であります。人となられたイエスですが、彼は御父に愛された独り子であります。そして、「喜ぶ」とはご自分の意にかなっている、という意味です。ここで、「そのような御父の声をしっかりと聞いて歩むことが、与えられた使命を全うしていく力の源泉となります。幼い時から十分に愛されて育つ子どもは自分に自信をもって生きようになるのと似ています。イエスも御父のこのうなる愛の声を日々、あらゆる時に聞いて歩むことで、御父を信頼し、御父から与えられた使命を全うすることができたとと言えます。そう考えるならば、真にすばらしいの就任式、任命式と言えるのではないかと思います。」¹

2B 神に至る系図 23-38

1C マリヤの先祖

23 教えを始められたとき、イエスはおよそ三十歳で、人々からヨセフの子とされていた。このヨセフは、ヘリの子、順次さかのぼって、

マタイの福音書 1 章にもイエスの系図が載っていますが、そこでは、「ヤコブにマリヤの夫ヨセフが生まれた。」とあり、ヨセフの父はヤコブになっています。つまり、ヘリはヨセフのしゅうとであり、実際にはマリヤの父であるのです。ですから、この系図は母マリヤのものです。

でも、なぜ、ルカはマリヤの系図を記したのでしょうか。創世記 3 章 15 章には、神が蛇に対し言われたことばで、「わたしは、おまえの子孫と女の子孫との間に敵意を置く。彼は、おまえの頭を踏み砕き、おまえは、彼のかかとかみつく。」とあります。ここの「子孫」とは、「種」とも訳すことができ、精子も意味します。なのに、「女の子孫」と言われているのは、キリストが、男を介さないで

¹ 牧師の書齋 <http://meigata-bokushin.secret.jp/index.php?%E3%82%A4%E3%82%A8%E3%82%B9%E3%81%AE%E6%B4%97%E7%A4%BC%E3%81%A8%E7%B3%BB%E5%9B%B3%E3%81%8C%E6%84%8F%E5%91%B3%E3%81%99%E3%82%8B%E3%82%82%E3%81%AE>

女から奇跡的に誕生することを意味しているのです。ですから、マリヤの系図は重要になってきます。

さらに、もう一つ理由が考えられます。31 節を見ますと、「ナタンの子、ダビデの子」とあり、マリヤがダビデの子孫であることです。ヨセフもダビデの子孫ですが、マタイの福音書を見ますと、ダビデの子ソロモンから、の系図になっています。ソロモンからダビデの家の王座が継承されて、そこからイスラエルに歴代の王が現われました。ダビデに対して、神はこう約束されました。「わたしはあなたの身から出る世継ぎの子を、あなたのあとに起し、彼の王国を確立させる。彼はわたしの名のために一つの家を建て、わたしはその王国と王座をとこしえまでも堅く立てる。(2 サムエル 7:12-13)」ですから、キリストが、ダビデの子孫の王たちの中から現れます。

ところが、問題があります。マタイの福音書 1 章 11 節に出てくるエコニヤという王に、神はさばきのことばを告げておられるのです。エレミヤ書 22 章 33 節です。「この人を「子を残さず一生栄えない男。」と記録せよ。彼の子孫のうちひとりも、ダビデの王座について、栄え、再びユダを治める者はいないからだ。」歴代の王の子孫からは、キリストは出てこないのです。したがって、ダビデの子孫であっても、他の子孫からキリストが出てきます。マリヤの先祖はナタンであり、ナタンの父がダビデであったことということで、イエスはキリストである資格があるのです。

2C アダムの子

こうして、イエスがマリヤからお生まれになったことがわかりました。次に、34 節に注目してください。「アブラハムの子」とあります。マタイの福音書はアブラハムからの系図になっていますが、ルカは、それをさかのぼっています。どこまでかと言いますと、38 節に出てくる「アダム」までです。彼は人類の父です。地上に現れた一番最初の人です。もしマタイのようにアブラハムから系図が書かれれば、イエスはユダヤ人であることが色濃く出てきます。けれども、アダムに至る系図ということで、イエスが、全人類を代表する、人であられることが強調されているのです。イエスは、ユダヤ人であられる前に、人であられたのです。ここから、キリストがユダヤ人の救い主だけではなく、人類全体の救い主であることがわかります。

3C 神の子

そして最後に注目していただきたいことは、38 節の最後のことば、「このアダムは、神の子である。」であります。創世記には、神が、人をご自分のかたちに創造された、と書かれています。アダムは罪を犯す前は、神のかたちをしていました。神に似た者だったのです。神により頼み、神に聞き従い、神と自分との間には、何の隔たりもありませんでした。ところが、禁断の実を食べたことによって、神から離れました。神のかたちから堕ちてしまったのです。

けれども、神の子としてキリストが現れたのです。神が造られた人として、神のかたちを持っておられる方として、イエスは現れました。私たちは、今の人間を見て、神の望まれているような姿を

見ることはできません。しかし、イエスを見るとき、神はもともと人間をどのようにお造りになりたかったのかを見ることができます。イエスは、理想の人、完全な人なのです。

ルカが同伴していた使徒パウロが、イエスが第二のアダムであるとして、人としてのやり直しを与えられました。まず、アダムは罪が世界に入ったその頭となりましたが、キリストは人々を義とする頭となりました。「ひとりの人(アダム)の不従順によって多くの人が罪人とされたと同様に、ひとり(イエス・キリスト)の従順によって多くの人が義人とされるのです。」(ローマ 5:19) 復活も同じように、地から造られた者としてだけではなく、天からのもの、御霊のからだを与える方として書かれています。「聖書に「最初の人アダムは生きた者となった。」と書いてありますが、最後のアダムは、生かす御霊となりました。最初にあったのは血肉のものであり、御霊のものではありません。御霊のものはあとに来るのです。第一の人は地から出て、土で造られた者ですが、第二の人は天から出た者です。土で造られた者はみな、この土で造られた者に似ており、天からの者はみな、この天から出た者に似ているのです。私たちは土で造られた者のかたちを持っていたように、天上のかたちをも持つのです。(1コリント 15:45-49)」ですから、イエスは私たちの「踏み直し」です。アダムの負の遺産を逆算してくださる方です。